

# 8 課

5月21日

## 約束



安息日午後 5月14日

### 暗唱聖句

アブラハムは多くの日を重ね老人になり、主は何事においてもアブラハムに祝福をお与えになっていた。(創世記 24 : 1、新共同訳)

アブラハムは年が進んで老人となった。主はすべての事にアブラハムを恵まれた。(創世記 24 : 1、口語訳)

### 今週の聖句

創世記 22 章、ヘブライ 11 : 17、レビ記 18 : 21、ヨハネ 1 : 1~3、ローマ 5 : 6~8、創世記 23~25 章、ローマ 4 : 1~12

### 今週のテーマ

ついに、神の約束どおり、サラは「年老いた」アブラハムに(創21:2)男の子を産みます。そしてアブラハムは、その赤ちゃんを「イサク」と名づけます(同21:1~5)。しかし、アブラハムの物語はまだ終わりではありません。その物語は、いよいよ息子をモリヤの山で犠牲として献げることでクライマックスを迎えます。しかし、イサクの身代わりに雄羊が備えられます(同22:13)。それは、彼の子孫を通して諸国民を祝福するという神の公約を意味していました(同22:17、18)。その子孫とは、もちろん、イエスです(使徒13:23)。したがって、この驚くべき(ある意味、苦悩とも言える)物語の内に、救いの計画が十分に表されているのです。

そこに示された教訓がどれほど深いものであろうと、そのためにアブラハムの家族は間違いなくこの出来事によって激しく揺さぶられ、そして、その時のアブラハムに未来はまったく見えていませんでした。サラはモリヤ山での犠牲の直後に亡くなり(創23章)、イサクは独身のままでした。

アブラハムはそこで確かに「正しい」未来に向かって自ら行動します。彼は息子とリベカの結婚を手配します(創24章)。彼女は2人の息子を産み(同25:21~23)、そしてアブラハム自身もケトラと再婚しますが、彼女は彼に多くの子どもを産みます(同25:1~6)。今週私たちは、アブラハムの人生の最終章をたどります(同25:7~11)。

問1 創世記22:1~12とヘブライ11:17を読んでください。この試練の意味は何であり、この驚くべき出来事には、どのような霊的教訓があったのでしょうか。

創世記22章は、世界の文学の古典であり、神学者のみならず、哲学者や芸術家たちにも影響を与えていますが、神のお与えになる試練の意味を理解することは困難です。神のこの命令は、後に聖書で禁じられている、人を犠牲として献げるといふことと矛盾しました(レビ18:21)。そしてそれは確かに、イサクを通して実現するはずの、神の永遠の契約に反する行為とも思われました(創15:5)。

では、アブラハムにそのようにお求めになった神の御目的は何だったのでしょうか。なぜこのような困難な方法で彼を試されたのでしょうか。

聖書の「試練」(ヘブライ語では「ニッサー」)には二つの相反する概念があります。一つは裁きを意味し、それは試される者の心の中に何があるかを知るためのものです(申8:2を創22:12と比較)。しかしそれはまた、試される者に与えられる神の恵みの保証をもたらします(出20:18~20)。

アブラハムの場合、神への信仰が、彼の「未来」(子孫)を失う危険を冒させます。なおも、彼は神を信じるがゆえに、それを頭で理解することがどんなに困難であろうとも、神の求めに従います。見えないこと、完全には理解できないことを信じるこそこそが、信仰なのではないでしょうか。

さらに、聖書の信仰は、神に献げ、神のために犠牲を払う能力を指しません——疑いなく、それは信仰の役目ではありますが(ロマ12:1)。信仰は、神に信頼する能力であり、受けるに値しない者であることを理解しつつも、神の恵みを受ける能力です。

この真理は、続く出来事の中で再確認されます。アブラハムのあらゆる働き、多くの熱心な活動、息子との苦しい旅、神に従い、最善のものを献げるといふ覚悟でさえ、それらはどれほど教訓的であったとしても、彼を救うことはできませんでした。なぜでしょうか。それは主ご自身が、犠牲として雄羊を用意され、それが彼の唯一の救いの希望であるイエスを指し示していたからです。

その時、アブラハムは恵みの意味を理解します。神のための私たちの行いが私たちが救うのではなく、私たちのための神の行いが救うのです(エフェ3:8をロマ11:33と比較)。アブラハムのように、私たちが神のために働くように召されているとしてもです。アブラハムの行いは力強い模範となっています(ヤコブ2:2~23)。

モリヤ山でのアブラハムとイサクの物語は、あなた個人の信仰とその表し方について何を語っていますか。

**問2** 創世記 22：8、14、18 を読んでください。主が備えてくださるとの約束を神はどのように成就されましたか。何が備えられていましたか。

イサクが犠牲の動物について尋ねたとき、アブラハムは「焼き尽くす献げ物にする小羊はきっと神が備えてくださる」(創22：8) という好奇心をそそるような答えをします。しかし、ヘブライ語の動詞をそのまま訳せば、実際には「神はご自身を小羊として備えられる」という意味になります。この動詞「備える」(イルエー・ロー) は、「自身を備える」(あるいは字義通りに訳せば、「自身を見る」という意味の言葉です。

ですから、ここで私たちに示されているのは、人類救済の計画の本質です。すなわち、主ご自身が犠牲となり、ご自身をもって私たちの罪の罰をお受けになるということなのです。

**問3** ヨハネ 1：1～3 とローマ 5：6～8 を読んでください。これらの聖句は、モリヤ山で献げられた犠牲の中に予表された十字架の犠牲を理解する上で、どのような助けとなりますか。

そこに、すなわち、十字架のはるか以前のモリヤ山で、「木の茂みに……角をとらえられていた」(創22：13) 犠牲の小羊は、まさしくイエスを指し示していました。後にアブラハムが、「主が見られるその山に」(同22：14、著者訳) と言ったように、主は「見られる」お方なのです。イエスご自身もアブラハムのこの預言的な言葉を指して、「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て喜んだのである」(ヨハ8：56) と言われました。

「神が、アブラハムにその子を殺すように命じられたのは、アブラハムの信仰をためすとともに、彼の心に福音を現実的に強く印象づけるためでもあった。あの恐ろしい試練の暗黒の数日間の苦悩は、人類の贖罪のために払われた無限の神の大犠牲を、アブラハムが自分の体験によって学ぶために神が許されたのである」(『希望への光』76ページ、『人類のあけぼの』上巻161ページ)。

モリヤ山で起きたことは、十字架で起きたことと、神が私たちのためにどんな犠牲を払われたかを理解するうえでどんな助けとなりますか。私たちは、私たちのためになされたことにどのように応えるべきでしょうか。

創世記22章には、リベカの誕生の記録があり、それは後のイサクとリベカの結婚を予期したものです(創24章)。同様に、アブラハムの妻、サラの死と埋葬の記録は(同23章)、後の彼のケトラとの再婚を予期したものです(同25:1~4)。

**問4 創世記23章を読んでください。サラの死と埋葬の記事は、神のアブラハムとの約束の成就において、どのような役割があるのでしょうか。**

イサクを犠牲とする物語の直後にサラの死の記事があるということは、息子の命に関わるこの出来事から彼女が何らかの影響を受けていた可能性を示しています。いずれにせよ、サラは今回も、過去に夫の旅に、そして時折見せる彼の信仰上の過ちに巻き込まれたと同じように(創12:11~13)、夫の「試練」に巻き込まれたのです。

サラは、自分にとって重要なこと、または彼女を苦しめる問題に対して黙っているタイプの女性ではありませんでした(創16:3~5、同18:15、同21:9、10)。この劇的な出来事における彼女の不在と沈黙、それに続く彼女の死は、彼女が物理的に存在していること以上に、この一連の出来事に関わっていたことを物語っています。アブラハムの老齢の記事(同24:1)に呼応するようにサラの高齢の記事(同23:1)が記されていることも、この物語におけるサラの重要性を示しています。

事実、サラは旧約聖書の中で唯一その年齢が記されている女性です。この事実は、この物語にとって彼女がどれほど中心的存在であったかを示しています。彼女の死よりもサラの埋葬の場所の購入が、これほど注目されているのは(ほとんどこの章全部が裂かれている)、約束の地との関連を強調するものです。

彼女が「カナン地方……で死んだ」(創23:2)と詳細に記されていることが、すでに、神の約束の地におけるサラの死を強調しています。サラはアブラハムの一族で最初に約束の地に葬られた人物です。アブラハムの心配は、彼が「一時滞在する寄留者」(同23:4)であることでしたが、ヘトの人々との彼の執拗な交渉は、アブラハムの関心が単に墓所の購入にあったのではなく、主として、この地に永住することにあったことがうかがわれます。

**創世記23:6を読んでください。この返答はアブラハムの評判について何を語っていますか。この事実は、彼が神に用いられた人であったことを理解する上でなぜ重要なのでしょうか。**

創世記24章はサラの死後、イサクの結婚の物語について語っています。これらの物語は関連しているからです。

**問5 創世記24章を読んでください。アブラハムはイサクがカナン人の娘をめぐらさないようにするために、なぜこれほど心を尽くしたのでしょうか。**

彼の子孫がこの地を受け継ぐようになるという神の約束のゆえに、アブラハムが妻を埋葬するための土地を手に入れるために力を尽くしたように、今、彼はイサクが約束の地の外に住まないよう力を尽くします(創24:7)。さらに、イサクが花嫁を母サラの天幕に案内したこと、そしてリベカが「亡くなった母に代わる慰めを」(創24:67)イサクに与えたとの記述は、サラの死に直面し、母を失ったイサクがどれほど心の痛みを経験したかを暗に語っています。

この物語は、祈りと祈りの成就、そして神の摂理と人の自由についての豊かな教訓に満ちています。この物語は、まずアブラハムの祈りで始まります。「天の神、地の神である主」(創24:3)への誓いで始まるこの祈りが、まず創造主なる神(同1:1、同14:19)への賛辞を述べているのは、創造主が、メシアご自身を含むアブラハムの子孫たちの誕生の責任を直接負われるからです。

「天の神である主」や「御使い」(創24:7)の引用は、死を目前にしていたイサクを救うために遣わされた「天からの主の御使い」(同22:11)を思い起こさせます。全宇宙を支配される神と、イサクを救うために介入した主の御使いが、この結婚の問題を導きます。

しかしながら、アブラハムは、その女性が神の召しに応じない可能性も否定していません。神は力強いお方であると同時に、人が従うように強制はされません。リベカに対する神のご計画は、エリエゼルに従うことでしたが、彼女は選択の自由を持っていました。この女性が彼と行かないことも可能であり、彼女がそれを望まないなら、それを強いられることもありませんでした。

したがって、私たちはここに、神は私たちに、人として自由意志、選択の自由、すなわち神が決めて踏みこむことのない自由をお与えになったこと、その大いなる神秘の一例を見るのです(もし神が強制されるなら、それはもはや自由意志ではありません)。そして、人の自由意志の現実と、人がその自由意志で下した選択の悲惨な結果にもかかわらず、私たちはなおも、最後の最後には、神の愛と善意が現されることを信じることができます。

たとい神のご意志通りにすべての事が運んでいないように見えても、すべてはなおも神の御手にあることを知ることは、なぜ大きな慰めなのでしょう。ダニエル2章のような預言は、この事実をどのように証明していますか。

**問6 創世記24：67～25：8を読んでください。このアブラハムの人生の最終章の出来事は何を意味するのでしょうか。**

サラの死後、アブラハムは再婚します。イサクと同じように、彼はサラの死後、慰めを得ます（創24：67）。サラの思い出は、息子イサクにとってそうであったように、彼の心の中に、なおも鮮明に残っていました。

彼の新しい妻の素性は不明です。しかし、歴代誌の著者が、ケトラの息子たちとハガルの息子たちとを区別なく記している事実は、（ある学者たちが考えるように）ケトラはハガルである可能性を示唆しています。また、アブラハムがケトラの息子たちに対して、ハガルの息子たちと同じように接していることもそれを暗示しています。

アブラハムは「全財産をイサクに譲り」（創25：5）、「側女の子供たちには贈り物を与え」（同25：6）しました。この「側女」〔口語訳では「そばめたち」〕には、ハガル同様、ケトラも含まれていると思われます。ケトラがハガルと同一人物であれば、アブラハムのケトラ（ハガル）との再婚の記述〔25章〕の前に、まず〔正妻である〕サラの思い出〔同23章〕が語られていることも納得できます。

創世記25：1～4、12～18で興味深いことは、アブラハムがケトラとの間にもうけた子孫のリストが、イシュマエルの子孫のそれと同じように記されていることです。ここにあって、アブラハムがケトラと再婚した後の子孫の系図が記された理由は、ケトラが産んだ6人の息子が、他の2人の息子（イサクとイシュマエル）に対して、アブラハムが諸国民の父となるとの神の約束に対する直接の証拠となるためであったと考えられます。

イシュマエルの子孫に関する二番目の系図もまた、ヤコブが十二部族の父となった（創35：22～26）のと同じように、十二部族を構成します（同17：20と比較）。しかし、もちろん、聖書がはっきり述べている通り、神の契約はイシュマエルでなく、イサクの子孫へと（同17：21）持ち越されることになります。

これら二つの系図には生まれたアブラハムの死の記録は（創25：7～11）、同時に神の祝福をも証ししています。それは、「長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く」（同15：15）とのアブラハムに与えられた約束の、多くの年月を経た後の成就なのです（コへ6：3と比較）。

最後まで、主は忠実な僕アブラハムに対する恵みの約束に忠実であられました。その信仰は偉大な模範として聖書に記録されました。それは「最高の」模範でなくとも、間違いなく、旧約聖書における「信仰による救い」の模範となったのです（ロマ4：1～12）。

アブラハムは、神がそのご計画を（創18：17）分かち合った特別な預言者でした。神はアブラハムの人生に介入し、御自分の独り子を犠牲にすることによる救いの計画をアブラハムと共有されたのです。

「イサクは、世の罪のために犠牲として献げられた神の御子の型であった。神は、人類に与えられる救いの福音をアブラハムの上に刻印されたのである。そのために、彼の信仰を試みるためと同じように、彼に真理を現実のものとするために、神は彼に愛するイサクを殺すことをお求めになったのである。アブラハムがその暗く恐ろしい試みの中で耐えた悲しみと苦しみは、彼の墮落した人類の救済の計画に対する理解が、彼の心に深く刻まれるためであった。彼は、完全な滅びから人類を救うために、御子を死に渡された無限の神の自己否定が、どれほど筆舌に尽くし難いものであったかを、自分の経験を通して理解するのであった。アブラハムにとって、息子を犠牲として献げるようにとの神の命令に従うことに並ぶ精神的苦痛はほかになかった」（『教会への証』第3巻369ページ、英文）。

「アブラハムは老人になった。そして、自分の死ぬときが近づいたのを知った。しかし彼は、子孫に与えられた約束を確保するために、しなければならない行為が、まだ1つ残っていた。イサクは、神の律法の保管者、選民の父として、アブラハムの後継者に任じられてはいたが、まだ、結婚していなかった。カナンに住む住民は偶像礼拝を行っていたので、神は、神の民と偶像礼拝者との雑婚を禁じておられた。神は、こうした結婚が背教の原因になるのを知っておられた。アブラハムは、彼のむすこの周囲にある腐敗的感化の影響を恐れた。……アブラハムにとって、むすこに妻をめとることは重大なことであった。アブラハムは、彼を神から引き離すことをしない人と結婚させたいと心から願っていた。……イサクは、父の知恵と愛情に信頼して、この問題を父にまかせて満足し、神ご自身がその選択を導かれることをも信じていた」（『希望への光』84ページ、『人類のあけぼの』上巻181、182ページ）。

### 話し合いのための質問

- ① イサクを献げることがいとわなかったアブラハムについて、クラスで話し合ってみましょう。その信仰を想像してみましょう。どんなに驚き、悩んだことでしょうか。
- ② 自由意志とは何でしょうか。なぜ自由意志なしには、私たちの信仰は無意味なのでしょう。自由意志の用い方について聖書の中にはどんな例がありますか。彼らの誤った選択にもかかわらず、神のご意志は最終的にどのように成し遂げられますか。